

新たな時代の学校と地域との協働



伏木 久始

(信州大学
学術研究院教育学系教授)

1. はじめに

私はこれまで県内各地の学校に招かれるたびに、地域と連携したユニークな取り組みをたくさん参観させていただいてきた。いずれも地域の子どもを地域で育てるといふ思いが溢れており、信州教育の伝統と地域を大事にする学校のあり方をうかがい知る機会となっていた。

本稿では、私が生まれ育った栃木での子ども時代そして東京での教員時代などをふり返りながら、私が「地域」とどう向き合ってきたのかを告白しつつ、長野の住民となっている今、これからの学校が地域とどのように協働していくことが求められているのかについて私見を述べてみたい。

2. 故郷からの「脱出」と「帰還」

私は高校を卒業してすぐに東京で一人暮らしを始めた。大学入試にも合格していません、

生まれ育った故郷を家出同然で飛び出したのだ。それは親や先生たちへの抵抗、あるいは封建的な慣習の残る農村社会からの「脱出」だったように思う。

北関東の貧しい専業農家で夜も副業をしていた両親とはレジャーに出かけた記憶がないが、子ども育成会をはじめ近所の人々とは家族のように接する風土の集落で育った。その頃のおじさん、おばさんたちの多くは既に他界されたが、私が故郷を思い出すときには今でもその頃の地域の人たちの姿が脳裏に浮かび、栃木で過ごした懐かしい出来事が私の「原風景」となっている。

しかし、私は学校で過ごした自分のことをほとんど思い出せない。学校の思い出は放課後の部活動や友人たちとのエピソードを語れるだけで、多くの時間を費やしたはずの授業については、記憶も曖昧ではあるが良いイメージがない。お世話になった当時の先生方には大変申し訳ないことではあるが、私が教育学を学ぼうと決意したのも、私の心の中で悶々としていた学校での授業内容に対する問題意識が人一倍強かったからだと思う。

まずは小学校時代。四十五名学級で六年間ずっと顔ぶれが変わらない単級学年だった。私が通った田舎の学校周辺には交番と市役所の出張所があったものの、教科書に出てくるような商店街や工場、消防署などの社会的機能を担う事業所がなかった。そういう地理的条件の制約もあった事情は理解できるが、ふだんの教科書での学習と全く関連しない繊維工場や飲料メーカーの工場などへ貸切バスで終日の社会科見学に出かけた意味は未だに理解できない。小学生の私たちには遠足気分が嬉しい「イベント」だったことは間違いないが、せめて自分たちの地域との関わりを学ぶ目的や、教科書を通して学習する内容との繋がりを意図して企画して欲しかったと思う。それ以外、小学生の私たちにとって地元をリアルに学ぶ地域学習はな

かったからだ。

中学校時代。部活動に熱中するようになると、みんな地域の行事には見向きもしなくなった。農家では中学生の手伝いを切望したはずだが、正月以外休みなく出かけられた部活動を、私は農作業をサボる絶好の言い訳にしていた。当時は地理的分野の学習内容に「身近な地域」という単元もあったが、中学校の敷地を出てフィールドワークをしたことはなかった。

高校時代。部活動の思い出以外は、受験競争をさせられた灰色の時間しか思い出せない。自分の故郷どころか県内のことを考える機会もなかったとふり返るくらい、参考書と問題集を「材」とした受験勉強の日常だった。当時の学校教育は、学年が上がるごとに結果的に子どもたちをどんどん地域から引き離す教育をしていたとも言える。私が通った高校のクラスメイトの中で、地元大学を第一志望にしたり、地元就職しようと考えていたりした仲間はほとんどいなかった。だから、大学生になるまで自分の母校周辺に貴重な史跡や重要な文化遺産があることも知らなかったし、関心も無かった。地域の人々が抱えていた課題などを考える機会もなのまま、私は地域の風習に平気でダウトをかけたり、より合理的な公共施設の運営方法への変更意見を無頓着に言い放ったりしたのだから、「屁理屈」・「偏向思想」などと非難されることもあった。その頃には、近所の大先輩たちとも話が合わなくなっていた。なかでも最も考え方が合わずに反抗した相手は父親だった。こうして私は一度故郷を捨てた。

上京してからの私は、住む場所や職業を替えながら、東京都内であわただしくも刺激的な生活を送っていたが、中高一貫校に赴任してから八年目に妻子を連れて十六年ぶりに故郷に戻る決断をした。私が教職を辞して大学院に復学することによる経済的な事情もあったが、わが子を育てる環境として、便利で魅力の多い都会のマンション生活よりも、自然豊かな農村に自分

たちの家を建てて暮らすことを優先した。

しかし、Uターン自体は歓迎されても、三十代半ばで大学院後期博士課程に進学し、妻子がいるのに無職学生（フリーアルバイター）となった私を見る故郷の人々の目は予想どおり冷たかった。私たち夫婦は実家の農作業を手伝いながら、幼い子どもたちと共に故郷の住民となる努力をし、しだいにコミュニティに受け入れられていった。

3. 地域をフィールドとしたカリキュラム研究

復学してまとめた博士論文は、戦後直後のカリキュラム運動期に、当時の教師たちが地域住民と協議を重ね、民間教育研究機関として設立された中央教育研究所の研究者たちの指導を受けて作成した「川口プラン」を対象とした実証的研究だった。戦後の教員不足の中、設備や教材も十分でない条件下で、教師たちは子どもたちと共に地域のありのままを調査し、住民の代表者らとも地域に求めたい学習内容を協議し、地域教育計画としての小中学校の教育課程を創り出したのである。川口市全域でのこうしたカリキュラム開発の実践は、全国各地に波及して同様の地域プランがそれぞれの地域に応じて創られたが、アメリカのバージニア・プランなどの先例をモデルにはしたものの、わが国の地域に根ざしたコア・カリキュラムの考え方を土台に、教師の主体性に委ねられて作成された経緯は特筆されるべき実践だった。

私は三年間の博士課程での理論研究を通して、地域をフィールドにした教育内容をカリキュラム化していくことの重要性和その授業実践の難しさを理解することになった。そして、自身もまた地域に根ざしたカリキュラム開発を実践してみたいと思うようになり、それまでに経験の無かった小学校教諭となって、子どもたちと共に地域を調査しながら探究する学習に挑

んでみたいと考えた。縁あって国立大学の附属小学校に勤務することになり、故郷の農村に住みながら、東京の学校まで遠距離通勤する生活が始まった。自分を含めた家族の生活圏としての栃木市の農村と、学校周辺地域であった文京区小石川との間には大きなギャップがあり、そのことを通して「地域」を考える私のアプローチに新たな視点が加わった（さらにその後長野市に転居する）。私は両地域を比較しつつ、双方の良さを見つけながら、自分自身が受けてきた小学校教育を「反面教師」とした地域の学習を構想し始めた。あわたたしい日常でも何とか時間をやりくりして、自転車で学校周辺の「モノ・人・事」を学ぶフィールドワークを重ねた。

四年生を担任した年には、「夢の町づくり」というテーマで総合学習の実践に取り組んだが、子どもたちは「ノンステップバス」や「バリアフリー」など九のテーマグループごとに「調査隊」に分かれて地域の課題を考える取材活動に熱中した。地域のフィールドに出て気づくこともあるが、取材に協力してくださった「人」との出会いも、子どもたちの課題意識を自分事にしていく上で大きな影響を与えることを理解した。自分なりの問題意識を持ち帰ってくる子どもたちの声を授業で共有させながら、学校周辺に住む人々と対話を重ねながら、この町をよりよくするために必要な取り組みは何かを考える授業を約一年続けた。この学習は、「地域を活用」したというより、地域の現実に学び、地域の中で子どもたちが様々なことを体験し、地域の課題を通して一人ひとりの子どもが学校周辺地域の課題を主体的に考えるに至った活動だった。

こうした実践から学んだこととは、学校が地域との協働という視野で教育活動を考えていく際、学校行事や地域行事における交流とか、登下校の見守り隊や環境美化の活動への「地域の人材活用」として連携を考えることよりも、教育方針や教育内容そのものに地域社会の声や要

望を取り入れながら、授業の中で地域との協働を実現させていくことが重要だということである。コミュニティ・スクールの発想はまさに地域住民が学校の教育課程づくりにも関与することが期待されているわけであり、人事異動で学校を転々とする先生たちに任せきりにしないで、その地域に住んで未来を担う子どもたちを育もうとする地域住民が主役となる協働のあり方が問われているのである。今後の学校のあり方を構想する上でも変貌する地域の実態に応じて地域の声が反映されるしくみをもっと必要になるだろう。

4. 地域の学習をどう捉えるか

地域の学習をどのようなアプローチから捉えていくのかということについて、ここでは「熟達化」の議論を踏まえてさらに考えてみたい。

教育学では、人が物事に熟達していくようすを「垂直的熟達化」と「水平的熟達化」に分け、さらに垂直的熟達化を『定型的熟達化』と『適応的熟達化』に分けて説明することがある。

『定型的熟達化』とは、特定の行為をより速く、より正確に遂行できるようになるという方向性の熟達化のことであり、百マス計算に代表されるようなドリルの訓練の成果がこれにあたる。また、『適応的熟達化』は、そのジャンルの知識・技能や経験知を豊富に持ち、対象の変化や多様性に合わせて手続きを柔軟に変えられるタイプの熟達化であり、料理の鉄人に代表されるような熟達化である。一方、水平的熟達化は、複数のジャンルにわたって水平的に移動する行為に関して熟達していくことを意味し、特定場面で学んだことや行為したことが全く別の状況において活かされるという経験が蓄積され、熟達が深まっていくケースを指している。

これらの熟達化の論理を地域学習に引き寄せて考えてみると、私たちが学校と地域との協働

という課題に向き合う際に、何を大事にしていくべきかを考えるヒントを与えてくれるように思う。すなわち、地域そのものが学習対象となり、地域の事象に関する「モノ・人・事」そのものを「ご当地検定」的に物知りになっていこうとする行為は『定型的熟達化』と重なるのに対し、地域の「モノ・人・事」を具体的に取り上げ、それぞれの事象をめぐる因果関係や地域的な特色を理解しようとする行為は『適応的熟達化』に重ねることができる。さらに、地域の「モノ・人・事」の中から、現代社会の課題もしくは他地域でも共通して解決策を求められている課題などを追究しようとする行為は、水平的熟達化の考え方と重ねて捉えることができる。

お米作りの学習単元を事例にもう少し具体的に説明してみよう。例えば、長野県内で最も早く田植えをする地域の場合とその理由を知っていて、その地域で収穫されるお米のブランド名や近年の店頭価格を知っているほか、それを生産する農民の経営状況まで知っている…などという学習成果は定型的熟達化のアプローチにより得られることが多い。それに対して、長野県内で最も早く田植えをする地域の事情を、その土地の地理的条件や社会的条件から説明することができ、地理的条件や社会的条件が変容した場合の変化を予想できるといふ学習成果を期待するのが適応的熟達化のアプローチと言えよう。こうした両者の垂直的熟達化の方向性にもとづく地域学習は、近年の少子・人口減少社会の進行に伴って自治体存続の危機感を高めている市町村において「ふるさと学習」として盛んに導入されている。

さらに、これらとは異なり、長野県内で最も早く田植えをする地域の場合との因果関係から、それと似た条件にある他地域の田植えの時期を予想したりできること、あるいは今までになかった新たな条件・社会的環境の変化がその地域でのお米作りをどう変化させるのかを考える

という学習は、地域で学びながらも地域エリアを超えて、他地域のことを関連させて考える学習に発展するという意味で、水平的熟達化のアプローチと言えるだろう。こうした水平的熟達化のアプローチで地域を見ると、「地域を」学びながら「地域で」考え、「地域から」人間社会をみつめる学習を構想する地平に立てる。身近な地域の学習は決して「井の中の蛙大海を知らず」に終わるものとは言えず、どのようなアンゲルから地域を見つめ、どのようなアプローチで子どもたちと共に学習課題を追究していくのかによって、地域学習の視野は大きく変わるのである。

垂直的熟達化と水平的熟達化は、発達段階に即した順序性があるというものでもない。幼い段階の子どもでも、学習の「転移」が認められるように水平的熟達化に類する学びが起こりうる。また、大人になっても垂直的熟達化に類する学びを深めているのが私たちである。両者の熟達に求められる指導の違いは、垂直的熟達化には対象世界との編み直しが行われるため、「モノ・人・事」の豊富な知識・情報を必要とするのに対し、水平的熟達化の方は相対的に物事を捉えるために多様な視点や異質な価値観との比較・考察を必要とするため、他者とのコミュニケーションをより多く必要とするということである。

以上のことから私たちが考慮すべきことは、地域を学ぶ際に特定地域の「ふるさと学習」を限定的・固定的な視野で取り組むのではなく、地域の特徴を相対的に比較した上で、個性的な存在としての地域を学びとるアプローチが必要とされるということであろう。また、地域を知ることが最終目的のではなく、地域を理解することを通して、社会のシステムや自分の生き方を考えるきっかけとなる課題追究をし続けることが大切なのだと思う。

5. 地域と協働する未来の学校

Society 5.0の時代はまもなく到来する。すると既存の価値観が揺さぶられ、現在の学校教育システムも見直され、これまで当たり前だったという観点から再構成されるだろう。これからの時代の学校においては、地域との協働による学校づくりも新たな発想が求められるかも知れない。以下、近い将来にはこんな村の日常が現実になるのではないかというモデルを描いてみたい。

朝七時を過ぎると、続々と自家用車や無人走行バスが地域交流センターに到着する。そこは保育園と老人ホームと障がい者の通所施設に隣接した子どもの居場所であり、屋外にはピクトープとプレイパーク、屋内には廃校となった学校から持ち込んだ学習教材や地域住民の寄付で揃えられた楽器や絵本、映画のDVDや音楽CDなども豊富にラインナップされているメディアコーナーもある。

毎週月曜日の朝は、子育てを終えた世代のボランティアスタッフによる無料食堂がオープンする。地元野菜をふんだんに使い、栄養バランスのとれた美味しい朝食をみんなが食べに来る。出勤前に子どもを送り届けた親御さんも、学校へ通う子どもたちも、村じゅうの人たちとオープンスペースで一緒に食事を楽しめて顔なじみになれる時間だ。

地域交流センターからは無人走行のスクールバスが三方面に出て、小中学生は小中一貫の義務教育学校へ、高校生は総合学科の単位制高校へ、重い障がいのある子どもは特別支援学校へ、それぞれのバスで移動する。スクールバスは子どもたちを送り届けた後は、高齢者や移動手段をもたない住民を対象としたオンデマンドバスに変わる。駅や病院、スポーツジム

やスーパーマーケットまでの往復を、スマートフォンで予約して利用するようになってい
る。月曜日の午前中、小学校も中学校も高校でも、子どもたちは異学年混合学級で担任の大人
たちと一緒に、集団での話し合い・聴き合いの時間であるサークル対話を楽しむ。毎日の給
食はランチルームに集まって食べるが、その時間には先生たちに代わって地域の人々が事前
登録の当番制で、給食指導を兼ねて子どもたちと一緒に給食を食べる。先生たちは別室で自
分の時間を過ごしたり、ソファアで昼寝したりして昼食休憩時間を自由に過ごせる。

学校図書館がない代わりに、毎週一回大型バスの移動図書館が学校にやってくる。イン
ターネットに繋がるタブレットPCで予約した書籍を受け取ることができ、話題の本や調べ
学習に必要な文献や趣味に関する書籍も簡単に検索して予約ができるオンライン図書館と連
動している。子どもたちのみならず、大人にも移動図書館は人気で、学校の先生たちも教材
研究を深めるために毎週利用している。

月曜日の午後には、前の週の学習実績のログを確認しながら、担当の先生がアドバイ
ザーとなって個々の子どもが一週間の学習計画を立てられるように支援する時間をとる。個
別最適化を実現するAI搭載の学習支援ツールを使うこともあるが、子どもたちは自分なり
の試行錯誤を楽しみながら、自分の学習スタイルを模索して学び方を学ぶこと自体に意義を
見いだすようになる。

火曜日から金曜日まで、午前中の授業は個々の子どもの追究を尊重する時間が確保され、
オンラインで専門的な講義を受講することもできる。時々効果的なタイミングで集団思考の
場面が設定されて協同的な学びも大切にされる。同様の到達度の子ども同士を取り出してい
る小グループ学習や、異学年合同での集団学習も学習内容に応じて臨機応変にコーディネート

される。先生の役割は子どもの学びを丁寧にとり、アセスメントするとともに、個に応じて的確な学習アドバイザーとして機能することとされる。午後の授業は、科目や難易度に応じて区分けされた選択クラスごとに集団での学び合いが中心となるが、体育や芸術系科目や技術・家庭などの技能系科目を重点的に配置される。午後の授業には地域住民の有志が授業補助に入ったり、生徒に混じって受講したりできる。

先生たちの間の事務連絡等はすべてオンラインの校務支援システムで徹底され、オフラインでの議論は毎週木曜日の放課後に校内研修や検討が必要な案件のみの九十分で実施される。職員研修では授業研究や生活指導にかかわる議論を深めつつ、一人ひとりの子どもの成長に関する情報交換を経て教育観・子ども観を磨き合うことを大切にしている。また、この学校もコミュニティ・スクールであり、每学期複数回のペースで職員会議に地域運営協議会のメンバーも合流し、そのまま地域学校会議が開かれる。

放課後の課外活動は週三回設定され、学校単位ではなく広域自治体ごとの社会体育部と社会文化部がプロリーグのジュニア組織や企業と連携して専門スタッフの指導の下で運営されている。

こんな学校と地域の関係になるのは、それほど遠い未来の話ではないように思う。これまでの日本の学校の多くは、会ったことも無い先人が立てた学校教育目標を「伝統」と称して、学校や子どもたちを取り巻く環境が大きく変化していても目標を変えないこと無く、先生方主導で学校運営がなされてきた。よく考えれば妥当性が疑わしい校則も見直すことなく、教室内のさまざまな文化もその教育的意義を問い直すことなく、一律共通の指導が行われがちであった。

しかし、コミュニティ・スクールへの移行が推奨されている現代、地域の人々と共に未来を生きる子どもたちにとってベターな提案を考えることを怠ってはならない。時代の流れに迎合せよという意味ではなく、最先端機器を導入すべしというつもりもない。古来より重んじられてきたことを踏襲すべきものもきつとあるし、子どもを主体とする授業づくりは信州教育が大事にしてきた不易の財産である。

本稿では、私の子ども時代のおぼろげな記憶から、学校での地域学習が軽視されていた時代の問題点を指摘し、それを克服する実践としての川口プラン等の実践を紹介し、子どもたちと歩んだ「夢の町づくり」の実践にも言及した。その上で、地域学習ということを熟達化の論理に引き寄せて論じた。地域を学ぶことは、地域を通して自分のあり方に気づき、自分の生き方を考える窓口になる学びであってほしい。そのためにも、これからの学校は、既存の学校教育の常識を前提とせず、子どもたちの教育にとってベターなあり方を常に考え続けていくというポリシーこそが伝統となるべきだろう。地域との協働というプロセスから今後新しい学校像が生まれてくるであろうが、どんな時代になっても、生まれ育った故郷としての地域を知り、その地域の中で考え、地域からみえる問題を発信する営みを大切にして、自分の故郷を愛せる人を社会に送り出すことが学校教育の使命なのではないだろうか。

これまでに私は実に多くの信州人から、地域自慢や地元の独自性についてのお話をうかがって来た。長野に転居していつの間にか十七年めとなるが、東京での暮らしよりも長くなるようにする今、私の生まれ故郷の栃木と共に、愛すべき地元として信州の地域とどう向き合うか、あらためて考える機会となった。